

第二十九章 罪の力からの救い

I クリスマンだけのための罪からの解放

罪の力からの救いは、すでに罪の罰から救われた人々に対する神の恵みの備えであるから、この教理の適用はクリスマンのみに限られている。クリスマンも罪を犯す気質を持ち、実際に罪を犯す。聖書も人間の経験も数多くの実例を提供している。信仰を持った者が自分の救いを疑うのもこのことのゆえである。しかし、救いについての疑いや、罪の実行に陥ってしまう代わりに、それによって解放が得られる神の恵みの備えを知るべきである。

II クリスマンの生活における罪の問題

- 1 二つの性質（Ⅱペテ 1：4） クリスマンは古い性質を保ちながら神の性質を受けたので、二つの性質を所有している。
- 2 肉の性質（ロマ 7：18） クリスマンの古い性質は肉に属するものである。「肉」ということは単に肉体を表すだけでなく、霊とたましいも指すからである。
- 3 神の性質（Ⅰヨハ 3：9） クリスマンは罪を常習としたり、罪を犯し続けたりしない。それはこの神の性質のゆえである。
- 4 二つの性質の対立（ガラ 5：17） すべてのクリスマンにはこの対立がある。勝利の秘訣は御霊によって歩むことである（5：16）

III 人生の規範としての律法

聖書の中の「律法」ということばに幾つかの意味がある。

- 1 神の指によって石の板に書かれた十戒（出エジ 20：1-17、31：18）
- 2 約束の地にはいった時のイスラエルの全政治組織。それには命令（出エジ 20：1-26）さばき（21：1-24：11）、諸儀式（24：12-31：18）が含まれていた。
- 3 地上における未来のメシヤ王国の根本原則（山上の垂訓）
- 4 人に対して啓示された神の御旨の何らかの面（ロマ 7：22、25、8：4）
- 5 自分たちの政府のために人間によって定められた行動の規範（ルカ 20：22、マル 7：11 参照）
- 6 旧約聖書では条件付きの働きの契約としても示されている。律法の形式は「あなたが良いことをするなら、わたしはあなたを祝福しよう」である。
- 7 肉に頼る原則としても用いられている。律法はそれを遵守する能力を与えなかった。

IV 人生の規範としての恵み

恵みの下にある神の子らにとっては、律法のあらゆる局面はいまや無効にされている。

（ヨハ 1：16、17、ロマ 6：14、7：1-6、Ⅱコリ 3：1-18、ガラ 3：19-25、エペ 2：15、コロ 2：14）

- 1 モーセ政体の法令と戒めは、いまやクリスマンの指針となる原則ではない。
- 2 恵みの下にある神の子らは、働きの契約の重荷から解放されている。
- 3 神の子とされた者たちは、もはや自らの肉の力によって生きるように求められていない。
- 4 「恵み」という用語は、律法とは対照的に全く功績のない者に対する神の愛顧であって、アダムのときに始まったあの人間に対処する神の方法を指す。
- 5 律法とは対照的に、恵みは三つの異なった局面の中に啓示されている。

①神は罪人を恵みによって救われる。

キリストの死を通しての救い以外に道はない（使徒 4：12）。これは神の絶対的な賜物であり（ロマ 6：23、エペ 2：8）、全く人間の功績に根拠をおかない（ロマ 3：9、11：32、ガラ 3：22）

②恵みによる保持

罪に対する束縛からの完全な解放。罪に対する人間側の支払いの責任を取り去り、人間の功績を永遠に除外する。神は恵みの行使を続ければよく、神の子らはその恵みの中にしっかりと立っていれば良いのである。（ロマ 5：2、Iペテ 5：12）

③恵みの原則に基づいた人生の規範を与えている。

神は聖書を通して完全な行動の規範を示しておられる。しかし、それらは神の愛顧を得ようとして行うのではなく、すでに愛する御子のうちに受け入れられているゆえに行うのである。「義人は信仰によって生きる」という原則に立って生きる人生である。それは内住の御霊の働きであり、諸原則は福音書、書簡の各所に述べられている。

V 勝利への唯一の道

クリスチャンに罪の力からの解放を得させようとしてさまざまな教えが提示される。

1 もし十分な規則を守れば、クリスチャンは必然的に神の栄光のために生きようになるという主張がある。これは肉に頼っているので必ず失敗に終わる。

2 クリスチャンは古い性質の根絶を求めてそれに達することができると教えられている。しかし、①根絶説の根拠となる聖句はない。②古い性質は肉の一部であり、神はそれを根絶されないが御霊によって打ち勝つ力を与えてくださる（ロマ 8：2）。③根絶説を体験した者はいないし、もしそのような人がいたなら、その人の子は罪のない子となる。④この説によると内住の御霊の働きも、意味もなくなってしまう。むしろ御霊の働きにゆだねて、古い人を脱ぎ、肉の行いを殺し、聖霊の中にとどまることの必要性について忠告を受けているのである。

3 救われていることで、御霊にゆだねなくても神の栄光のために生きることができると考えている。ロマ 7：15-8：4においてパウロはこの説によって体験したことを記している。ロマ 6：1-10には信者の罪の性質はキリストと共に十字架につけられ葬られることによってさばかれ、それによって、内住の御霊が勝利を与えることを可能にしたと記されている。

VI 御霊による勝利（ガラ 5：16）

罪の罰からの救いが信仰によるように、罪の支配からの解放もまた信仰により、恵みによる。それ人間の功績ではなく、内住の御霊の働きであることが判る。救われたものは、御霊に頼ることは必要ないとは決して言えないのである。

クリスチャンは以下の三つのことのゆえに聖霊に頼る必要がある。そして、そのときに初めて勝利あるクリスチャン生活を経験するのである。

- 1、御国の生活基準に直面している
- 2、この世の支配者であるサタンに直面している
- 3、自分では制御できない古い性質をもっている